

定着のきざしを見せる

岩手町のホワイト・アスパラガス

生産と加工をつなぐ強い紐帯

河 見 泰 成

岩手県のアスパラガス

生産と加工をつなぐ強い紐帯

今度の戦争が勃発した12月8日から3週間後の昭和16年12月29日、農林省の斡旋で、岩手県内の缶詰企業体が合同して、資本金40万円の“岩手県缶詰株式会社”が誕生した。(現在の岩手缶詰株式会社の前身である。)

そして戦争が終った翌々年(22年)頃からようやく缶詰輸出の引合が活発化するに処するため細浦(大船渡)、磯鶏(宮古)、広島(広島県海田町)に工場を新設し、さんま、かつを、かき、あわび等海産物の缶詰輸出に傾注した。

その後、農業基本法の制定、畑地農業振興のムードがたかまるとともに、岩手県では“地域経済開発”が強く要請されるに至った。とくに、県都盛岡を基点とする“県南”と環境的に、構造的に全くちがっている“県北”の畑作産業を振興する具体策の策定が、その1つの中核をなすものであったからだ。

すなわち、盛岡以北に適地を選定して、ここに約1,000haに及ぶアスパラガスの集団産地を設けようという計画。今から12年ばかり前のことだ。

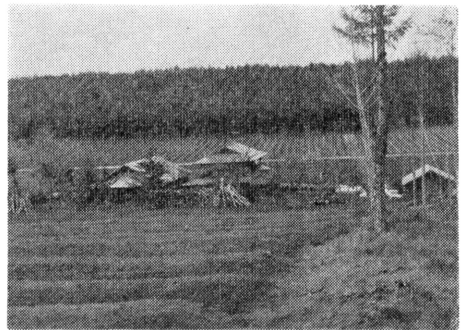
この県の地域経済開発の要請にこたえたのが、この岩手缶詰株式会社(I.C.Cとも云う。)だ。県、県経済連など関係当局との折衝も順調に進行して、昭和36年、アスパラガス、洋梨、桃、なめこ、とまと、りんご、ジュース類などの缶詰を製造する盛岡工場が完成した。

釜石市に本拠を置く水産物加工専門の企業が、こんどは農産物の加工にまで手をつけたというので、“魚陸に上がる。”と、県内の話題をさらったものだ。ところが現在資本金3,000万円、7工場の、さして大きからざるこの地方企業が、なんと、アスパラガス缶詰では全国生産量の20%で全国第2位、かき缶詰、干鮑、鮑缶詰はともに50%で全国第1位、さんま缶詰は40%でこれまた第1位を占め、県が意図する地域経済開発の有力な担い手であるから愉快である。

そして、アスパラガスその他の缶詰加工用農産物を生産する農家と会社の間は、“契約栽培”と“岩手県加工野菜対策協議会”という、太い、2本の紐帯で結ばれている

のだ。こうして、岩手県農民の与望を担ってスタートしたアスパラガスの栽培であったが、高米価政策が続いて米の生産に多分に魅かれていた間は、手をつけては止め、止めたかと思うとまた手を付けたりで、累積すれば主産地の岩手町あたりでも300haにもなるらしいが、これまでのところ、一向に栽培面積が定着せず、関係者を心配させたらしい。ところが、米の生産調整がこれまで以上にきびしくなるにつれて、今年あたりの様子はだいぶ変わってきているようだ。もっともこれまでのところ、アスパラガスに対する需要も、レタスやピーマンなどのように普遍化しなかったし、それにつれて“山あげ価格”も低かったのだが、最近では需要の伸びも十分期待が持てるようになったし、今年の“山あげ価格”が1kg当り1級200円、2級135円、級外30円(昨年は1級176円、2級125円、級外30円)と、上級物に有利に格付けされたことが、よほど各農家の生産意欲を刺戟したようだ。

丹内さんのお宅



県経済連の千田課長の話によると、例年より約1週間遅れたそうだが“11日800kgの初出荷”があり、気象環境等必ずしも良いとは云えぬ今年ながら、“単位面積当り500kgは確実だナス…”という計算通りなら、10a当り10万円の“山あげ”はまざまちがいなだろうし、集荷の連絡があり次第、会社の“通いケース”に、ノミで17cm程度に切りとったアスパラガスを所定の数量だけ詰めて、庭先に置いておけば、それでおしまい。アスパラガスの採取に労力がかかるだけで、包装の心配も、集荷所へ運ぶ必要もないのである。

芽ぶきはじめてからまつの道

石川啄木のふるさとを通る

千田課長が“アスパラガスは岩手の特産だなさ。”という、そのアスパラガスの栽培に燐硝安加里は無くてはならない肥料である。“だから今度連絡したときは、必ず盛岡に来て下さいよ。”と、チッソ旭肥料(株)東北出張所の井上さんが云っていた懸案が実現して、筆者は去る5月12日午前、盛岡駅前で井上さんと落合った。

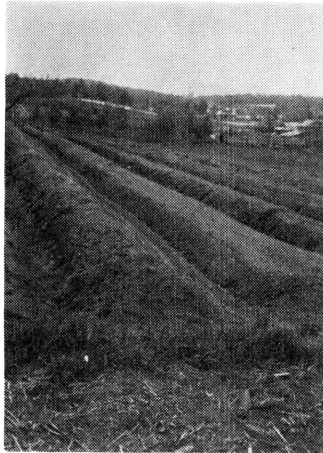
この日は、きのうまでの鬱陶(うっとう)しさと打って変わった上天気。桜はさすがに過ぎてはいたが、時には満開のなたねが見られる盛岡一帯は、まさに萌え出でんとする緑のいぶきがいっぱい。中学生の頃に訪れ、友人とその流れの音に耳を傾けた北上川が懐しかった。

そして、思いがけぬとき、そそり立つ南部富士(岩手山)が見えたりする。早春の盛岡は、さながら処女のようになさ感じられた。

“今日晴れたのは、晴れ男のあなたが来られたからですよ。”と、井上さんがほめて呉れたのは良いが、筆者の来盛が遅かったので、現地へ行く時間が無くなったとあって、高橋文之(県農産園芸課)、上原旭夫、千田武、松田俊一(県経済連)、菅原久治郎、小田原松男(県経済連盛岡事業所)ら皆さんとの挨拶や話はそこそこに、県庁前から井上さんの自動車で、約35km北方の岩手町を目指す。快晴

丹内さんの圃場(38年植のもの)

の空、見えかくれする岩手山、そして、いま芽ぶいたばかりの落葉松の緑の明るさが目にしみるようだ。というのに、対向車は時たま姿を見せるだけ。



北原白秋に“からまつの林を出でて、からまつの林に入りぬ。からまつの林に入りてまた細く道はつづけり。”という詩がある。そういう感じのところをスイスイと自動車は行く。

“自動車も来ないし、景色は良いし、全く長生きした感じだなあ。”と云ったら、“こういうところだから、却って大事故が起るんですよ。”と井上さんにおどかされた。

しばらくすると道がひらけて、右手の小高い所に木札が建っていて、それには“石川啄木の歌碑”と書かれてある。

“ああ、浜民村だなあ!”と思う。そして啄木に“やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに”という歌があるが、この歌を詠んだのは、ここではないのかなど考えているうちに、左に迫った北上川の清流に沿ってダラダラと下ったところに、2階建の事務所が見え、“やっと到いた。”と井上さんが云った。岩手町農業協同組合である。

アスパラガス栽培の条件

岩手町とその環境について

営農販売課にあって、とくに営農指導には高い理想を掲げ、強い信念で当たられている三浦義信さんと、岩手町の中心部で昼食をともにした。ここも盛岡と同様、筆者が年少の頃ここで父君が薪炭商を営んでいた友人のM君宅に、約1週間滞在させて貰ったことがある。(沼宮内町と云っていた頃。)

夜、駅からM君宅までのしばらくの間、左手には雑木や笹など生い繁った北上川の土手が迫り、流れる水音に都会育ちの筆者は、何か無気味なものを感じながら、M君に遅れまいと一生懸命に歩いた憶えがある。夕方歩いた川原には月見草が咲いていたから、あれは夏期休暇中のことだったかも知れない。

それにしても、この辺一帯のなんという変りようだろ

北海道では30年もとれるだなさ。

(丹内さんが手にしているのはノミ)



う。しかし記憶ちがいかわからないが、その頃に見た暗さは、今のこの町には無い。

イギリスを原産地とする食用アスパラガスがわが国に輸入されたのは、1873年、北海道開拓使によると云われる。そのアスパラガスが岩手県で栽培されるようになった顛末は、前述したとおりだが、ここにはアスパラガス栽培上、いちばん影響がある土壌条件について、記しておきたい。

アスパラガスは深根性で、その根は貯蔵的役割を持っている。とくに缶詰加工用のホワイトを栽培するには、毎春25cm程度の培土をし、夏季(7月13日頃)これを崩して側溝に施肥する作業を10数年繰返すので、土壌の

肥沃度と物理性が収量、品質を大きく左右する。そこで、河川沿いの微細な砂を含む肥沃な沖積土

ロ、腐植に富む火山性土壌

が、表土が深く、通気や透水性が良好で、膨軟多孔性の有機質に富むので、アスパラガス栽培に好適とされる。すなわちホワイトの場合は、粘質で固結し易い土壌であったり、表土に石礫が多いくては、若茎が高うねの中を伸びるとき湾曲するものが多くなり、不合格品となるので、壇壤土、砂壤土で、構造の発達が良好且つ軽しう肥沃な土壌で、pH6.0~7.0程度の緩傾斜地であることが望ましい。

“その点、わが岩手町の土壌条件は誠に願ったり叶ったり…。この辺の畑と来たら、春になって雪さとけると、今度は風、雨せえ降らねば風、毎日のように10m以上の風だ。そのため、(現地へおいでればお判りのように)干飯をぶち撒いたように堆積している表土(肥料分を含んでいる)が、なんと20cmも飛ばされる。眼(まなこ)さあけてるどころか、視界ゼロのような時もありやす。その代り、おら方の肥えた土さ飛んだあとへ、わきの肥えた土が飛んで来るで…。培土を盛るのに苦労は無え土だ。ア

ハ…。”と三浦さんは苦笑した。

これは、昼食後、この辺での代表的人物である岩手町一方井(一方井と書き地もとは“えっかたい”と読んでいる)部落の丹内栄之助さんの圃場へ行く途中で、三浦さんが話して呉れたことだが、それにしても、この岩手山麓の台地を咫尺(しせき)を弁せぬまでに、強風が荒れ狂う日の凄まじさが想像される。いやそれだけならまだしも、“この辺は、まんず1mは普通、吹きだまりには3m”もの雪が降るのだそうだ。三浦さんらと歩るきながら、筆者は胸うずく思いが去らなかった。

丹内さんの経営と意見

多忙にあげられる毎日

ほどなく丹内栄之助さんのお宅に到いた。写真で見る丹内さんのお宅を中心にして、南へ次第に高くなる緩やかな斜面と、お宅の方へ向って西から東方へ圃場が展開している。アスパラガスの経営面積2.5ha。この辺で3

人ほどいるというアスパラガス専業農家の1人で、“ことアスパラガスなら丹内さんに訊け”と云われている人物、当年54才である。

“とおちゃんは畑だ。ナス”一。挨拶に出てこられた奥さんに会釈をして筆者らが、南斜面を上って行くと、,,やあどうも…。”と云いながら、スポーティーなジャッポをやや眼深に冠り、釣りが、猟にでも行くようなスタイルで、ベルトの左側面に魚籠のようなものを下げ、ノミ(培土の中の採取適期のホワイト・アスパラガスを17cm程度の長さで切るもの)を持った人物が降りて来た。丹内さんである。血色がすこぶる良く、鼻下にたてた鬚は粹(いき)でさえある。頂戴した名刺には県農業会議員、県農政部会議員、町農業委員、町農協理事、町営農販購買部会長、町代理理事、信義佐和アスパラ生産組合長と、たくさん

1週間遅れたナス(右から三浦、丹内さん)

の肩書があった。これらの役職はいずれも地についたものだから、丹内さんの日常は多忙だ。今日はとくに、われわれのために時間を割いて下さった訳で、恐縮した。

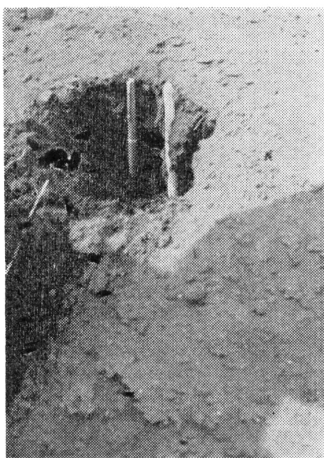
さて、アスパラガスの一般的な施肥法としては、初年目は定植溝に堆肥と混合して施し、2年目は早春畦間に施し、3年以後は毎年培土崩し(丹内さんの場合は収穫は7月13日で止める。そうしないと根が弱って翌年の収穫に影響が出る。)の時に畦間に施肥する。(畦と畦の間隔は2m)

培土は5月に入って気温が15~17℃になって、若茎が地上に出はじめたら、直ぐに行なう。(若茎の先端が陽光に当りグリーンに着色したものは、ホワイトとしては格別になるからで、ホワイトの場合は培土の時期が品質を決定するカギになる。

収穫は、培土後数日で若茎が伸び、土の表面を持上げかけた頃にノミを入れ、17cm程度に切りとる。気温が上昇して生長の最盛期には、1日に3回ぐらい巡回が必要だということだ。

“ちょっとご覧なさい。”と、三浦さんは丹内さんのノミを借りて、培土の表面が割れたかと思われるあたりを、横からサクッとノミを入れると、培土が崩れて白い可憐なアスパラの茎が採れた。“馴れた者なら何んでも

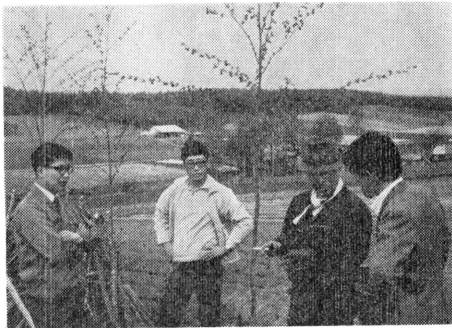
培土の中のホワイト・アスパラガス(左は万年筆)



ねえス。”とのことであつた。

収穫は、採れるにまかせて採ったかどうか、前年秋ま

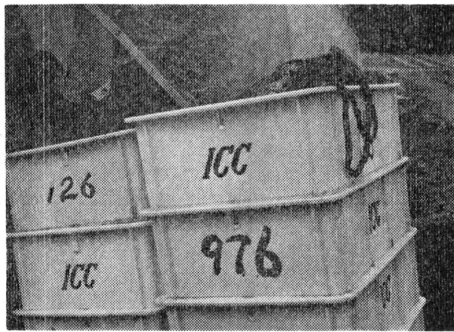
圃場で語る (右から三浦, 丹内, 久保, 井上の皆さん)



での株の生育状況によって左右されるが、一般的には、定植後3年目で2~3週間、4年目で4~5週間、5年目で6~7週間、6年目以上になると8週間ぐらいと見られている。つまり、定植後7年ぐらいまでは次第に増加し、12年ぐらいまで一定収量が得られ、以後次第に減収となるが、肥培と土壌管理によっては、20年の連続栽培さえ可能だと云われているが、この点について丹内さんは、

“20年どころか、北海道では30年間も収穫してる人が

岩手缶詰(株)の通い函



いるそうだな。おらのとこは、あっちの方が34年に植えたところ、その少し手前の方が36年に植えたところ、いまノミ入れたところは38年植えたところだな。34年と云えば12年前になるが、その頃の苗代5,000円は決して少額のお金ではなかったも、今になってみると、安いもんだな。と丹内さんは述懐し、“こんなところおられて淋しくはありませんか”との筆者の問いに対し、

“親子3人で…、何んもハア考えたことねえス。静かだな、仕事のことさ考えるにええっちゃ。”と云って笑った。

なお、岩手県並に県経済連ではこれまで、くみあい燐硝安加里S 604 (16-10-14) を、アスパラガス専用化成として

	604号	鶏糞	消石灰(kg)
1年目	140	100	150~200
2年目	160	100	150~200
3年目	180	140	150~200
4年目	220	140	150~200
5年目	240	200	150~200
6年目	260	200	150~200
7年目	280	200	150~200
8年以降	280	200	150~200

を施肥基準量として指導してきたが、最近では、くみあい燐硝安加里1号(15 15-12)をアスパラガス専用化成として指導している。なお栽培に当っては、標準施肥量のほか堆肥10a当り1,800kgを投入するよう指導しているが、指導方針を軽視する農家も少なくならしく、この点、県経済連生産資材部肥料課の松田さんは、“もっと慎重に土壌管理に留意して欲しいものだ。”と生産農家に呼びかけているが、一方、“土壌消毒的な意味合いや、防除の目的から、丹内さんのように石灰燐素を施用する人もいる。”ことを指摘していた。

丹内さんの圃場を引きあげた筆者らは、一同揃って盛岡市下太田第九地割字沢田にある岩手缶詰(株)盛岡工場を訪問し、栽培指導課長の高橋哲夫さんらにお目にかかったが、

“肥料の良し悪しを云うよりも、くみあい燐硝安加里を使うようになってから、県内のアスパラガスが一定品位のものがとれるようになったことが、一番はっきり云えることだな。それまでは、有機質肥料だのいろんな肥料を使ったので、缶詰製品の規格を統一するに骨を折りました。”

と、語った。

あ と が き ことしの異常気象で、東北方面では相当の稲苗代の被害が出ているようです。中にはビニールの中で立枯れているのもあるとか。生産調整は100%になるだろうなどと、苦笑している人もいますが、なかなか、笑い話で済ませることではないでしょう。

いずれにせよ、夏季の短かい、冷涼な年になるのではないのでしょうか。

快適な青い空の季節は去って、どうやら梅雨のはしりがはじまったようで、今日も朝からどんよりした日です。

ご活躍をお祈りいたします。 (K生)